

東京大学での所属学部/研究科・学年(渡航開始時):	教養学部 地域文化研究学科 ロシア・東欧地域文化研究分科 3年
留学先大学: サクトペテルブルク大学	留学先所属学部/研究科等: 歴史学部
卒業・修了後の就職(希望)先:	1.研究職

<p>1. 留学先大学の概要</p> <p>サクトペテルブルク大学は1724年に設立されたロシア最古の大学であり、設立から今にいたるまでロシア最高峰の大学の1つであり続けている。2014年2月現在、同大学は24の学部を初めとする様々な研究・教育施設を擁し、卒業生の中には政治、経済、自然科学、文学など、あらゆる分野の著名人達が含まれている。例えば、現ロシア連邦大統領であるウラジーミル・プーチン氏も卒業生の一人である。</p>
<p>2. 留学の動機</p> <p>後期課程に進学後、研究職を志望するようになり、大学院へ進学する前に自身の語学力(主にロシア語に関して)を大幅に上げておく必要を感じたこと、研究対象であるロシア文化に対する広範な知識を得たいと考えたこと、この2点が留学を志望した主な動機である。</p>
<p>3. 留学の時期など</p> <p>①留学前の本学での修学状況: 西暦[2013]年教養学部[3]年の[冬]学期まで履修</p> <p>②留学中の学籍: 留学</p> <p>③留学期間: 2013年2月7～2014年1月31 学部[3]年時に出発</p> <p>④留学後の授業履修: 西暦[2014]年 学部[4]年の[夏]学期から履修開始</p> <p>⑤就職活動の時期: 未定(大学院進学予定)</p> <p>⑥本学での単位数: 留学前の取得単位[61]単位 留学先で取得し、本学で認定された単位[12]単位(予定) 留学後の取得(予定)単位[20]単位</p> <p>⑦入学・卒業/修了(予定)時期: 西暦[2010]年 [4]月入学 西暦[2015]年 [3]月卒業/修了(予定)</p> <p>⑧本学入学から卒業/修了までの期間: [5]年[0]ヶ月間</p> <p>⑨留学時期を決めた理由</p> <p>学部3年に進学した頃から、交換留学、あるいはそれに準ずる方法でロシアの大学へ1年ほど留学することを考え始め、可能な限りもっとも早く留学を開始できる時期を選んだ結果、学部3年の履修直後となった。</p>
<p>4. 留学の準備</p> <p>①留学先大学への入学手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)</p> <p>ペテルブルク大学と直接コンタクトをとるようになるまでは、東大側の担当者からの指示に従い、期日通りに行動しておけば問題ない。ペテルブルク大学との連絡では、相手のメール返信等が遅れることが多々あるので、何事も早めに行動しておくほうが良い。</p> <p>②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)</p> <p>ロシアに入国する際は、六本木にあるロシア大使館に直接出向いてビザを取得しなくてはならない。留学ビザは、通常の旅行ビザとは取得に必要な書類が異なっているため、大使館ウェブサイトなどで確認する必要がある。</p> <p>大使館での手続きからビザ受け取りまでは最短で1日で済むが、手続きから受け取りまでの期間が短くなればなるほど高額な手数料がかかってしまうため、書類が揃い次第、直ちに大使館へ行くほうが良い。</p> <p>③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)</p> <p>駒場の保健センターで、留学のために必要な健康証明書を全てそろえることが出来た。全学生が対象の健康診断を</p>

受けていない場合は、健康診断を改めて受けなくてはならない。また出入国やビザ発行には問題ないが、もしペテルブルク大学の寮に住む場合は、入寮時に肺のレントゲン撮影の結果を提出させられる(このことはペテルブルク大学が用意する英語版ガイドブックにのみ記載されているので、注意しなくてはならない)。用意できない場合は、後日ロシアの医療機関で撮影しなくてはならないので、これも日本で用意しておいた方がよい。

#### ④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

「AIU 保険会社」という会社の、インターネットで手軽に加入できる海外旅行・留学保険を利用した。留学中、特に事故などに巻き込まれることなく過ごせたため、不測の事態に陥った際にどのように保険を利用するか等については、具体的には分からない。

#### ⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

東大で学部4年生として過ごすはずだった期間をロシアで過ごし、帰国後に留年することで第4学年をそのまま1年先送りする形になったので、特別な手続きは行っていない。例えば第3学年の夏学期履修後に留学開始、第4学年の冬学期開始直前に帰国し、直ちに就活または進学準備を始め、半年後に卒業する、といったように、留学による卒業年度の延長を避ける計画を立てた場合、単位取得や振替などについて入念に調べておかななくてはならない。

#### ⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

ロシア語学習に関しては、入学以来常に真剣に取り組んできたつもりであったため、留学を意図してからも特に特別な準備をしたことはなかった。現地の授業は全てロシア語で行われるとのことだったので、英語については一切考慮しなかった。

#### ⑦日本から持参の方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

ペテルブルクは非常に便利な都市で、生活に必要な大抵の物は現地で購入することが出来る。常備薬を除けば、日本から日用品を持参する必要はあまりない。

ロシアに到着した際、大学側の送迎などは期待できないので、空港から寮までどり着く方法を入念に調べておくべきである。日本で買える旅行用ガイドブックも持参しておくに役立つ。地下鉄の切符売り場やスーパーマーケットなど、ペテルブルクの街中では英語が通じない場所も多いので、日常会話に自信が無ければ、多少練習しておくが良い。

ロシアではWi-fiが非常に発達しているので、日本からスマートフォンを持参すると、様々な場所で利用することが出来る。

### 5. 学習・研究について

#### ①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

・春学期(留学期間前半)

「19-20世紀亡命ロシア人社会史」●

「ロシア音楽文化史」●

「現代ロシア史」

「古文献学、古文書学、テキスト批判」●

ロシア語(週2回)

・秋学期(留学期間後半)

「18-19世紀ロシア文学史」●

「中世ロシア文学」●

「19世紀ヨーロッパ・アメリカ文化、文学」●

「文化史概論」

「19-20世紀ロシア文学精読(ゼミナール)」

「ロシア伝統文化(ゼミナール)」

ロシア語(週1回)

(※単位認定申請科目は全て予定)

## ②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

大学付属の研修施設で行われるロシア語の授業やゼミは、東大での語学の授業とほぼ同様の形式で、困難を感じることはあまり無かった。

学部で行われる、現地のロシア人学生と共に受ける授業は、学部によって形式が大きく異なる。歴史学部で行われていた授業の殆どは、教員が板書すら行わずに授業内容をひたすら読み上げるというもので、留学開始直後は特に、主にロシア語の聞き取り能力の問題から講義内容を理解するのが非常に困難だった。そこで、現地でボイスレコーダーを買い、講義に出席してノートを取りつつ内容を録音し、それを寮の自室で聞き直ししながら、文献やインターネット上の資料を参照しつつノートを完成させるという方法で復習をしていた。

## ③1学期あたりの履修科目・単位数、週あたりの学習・研究時間(授業時間・授業以外の学習時間)など

90分を1コマとして、春学期は歴史学部での授業を5コマ、語学研修施設での授業を4コマ履修。秋学期は学部で4コマ、研修施設で4コマ履修。研修施設では、各授業の成績と履修時間を証明する書類のみが発行された。学部では上記2つの他、ECTS(European Credit Transfer System)という制度に基づく単位が認定され、私の場合は9コマ分の授業で19単位が認められた。

学習時間について。毎週4コマ(360分)ある語学の授業では、毎回何らかの課題を出されるので、それに対して毎週3~5時間ほどの学習時間をとっていた。学部の授業については、前述の通り、講義を録音し、文献を参照しながら理解できるまで録音を聞き直し続けるという学習方法をとっていたため、90分の授業に対して予習・復習時間がその何倍にもなった。全ての講義でこの方法を実施するのは気力の面でも時間の面でも困難だったので、最低限の復習のみで済ませる優先順位の低い講義も、各学期に1コマほどあった。

このほかに、帰国後の卒業論文執筆や大学院での研究に備え、ロシア語資料の読解やロシア語以外の語学学習などを自主的に行っていた。

## ④学習・研究面でのアドバイス

いずれの授業でも、授業後に質問をするなどして、教員と頻繁にコミュニケーションをとっておくことが大事である。講義の理解に繋がることはもちろんだが、ロシアの期末試験は原則的に全て口頭試験であるため、教員と会話することがそのまま試験対策に繋がる。また、自身の研究分野についての助言を受けられることもあった。

## ⑤語学面での苦勞・アドバイス等

講義を聴くだけでは内容を理解できない、入念な復習をしても不明な点が残る、理解しても記憶すべき内容が多すぎて処理しきれない、という日々が続いても、とにかく辛抱してくじけないことが大事だと感じた。各々の目的に合わせ、自分なりの学習スタイルを早期に確立していくことが有益な留學生活に繋がるのではないだろうか。

## 7. 生活について

### ①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

ペテルブルク大学へ交換留学を申請する際に、希望すれば同大学付属の学生寮に入居することができる。学生寮は市内に数件あるが、同じプログラムで留学している学生はおおむね同じ寮に入居させられるようである。東大からの全学交換留学制度で留学した学生は、私が知る限りでは全員、最も快適であるとされている寮に入ることができた。家賃は月に3750ルーブル(13000円ほど)で、1~2人の学生と相部屋になるものの、住環境に関して不満を感じることはあまりなかった。その寮に住む学生は留学生が大半で、ロシア語が全く話せない学生も多く、ロシア語で会話する機会と英語で会話する機会が半々といった感じだった。

### ②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

ロシアの冬は非常に寒いですが、寮も含めた建物の中はどこも暖房が効いていて快適である。コートや帽子など、外出用

の防寒着を一通りそろえれば、問題なく暮らせる。むしろ、空調設備が無く風通しが悪いため、夏場に気温が上がった時の方が過ごしにくい。

寮は団地が建ち並ぶ住宅街の中に立地し、徒歩圏内にスーパーマーケットやコンビニのような店舗がたくさんあるため、生活するには非常に便利である。バスと地下鉄を乗り継げば、ペテルブルクを中心街まで 30 分ほどでたどり着くことができ、世界的に有名な美術館や劇場へも気軽にアクセスできる。大学のキャンパスまではやや遠く、歴史学部のキャンパスまではバスで 40 分~1 時間ほど、国際関係学部など遠方のキャンパスへは、バスや地下鉄を乗り継いで 1 時間半近くかかる。留学生を含めた全ての学生は、市営のバスや地下鉄が乗り放題になる学生券を月 2500 円ほどで利用できるため、交通費の心配をする必要はない。

大学内の所定の部署で契約すれば、寮の自室で有線のインターネットを利用することが出来る。私は、部屋のルームメイトと折半し、部屋に Wi-fi のモデムを設置して利用していた。

物価は東京と比較するとかなり安い、外食だけは同等、あるいはペテルブルクのほうが高価なので、寮の部屋にあるキッチンで自炊をしたほうが遙かに安上がりである。

現金は当面必要な分のみは持参したが、現地での買い物はできる限り学生カードでの決済で済ませ、現金が不足した際は、カードのキャッシングを利用して ATM から現金を引き出していた。寮費の納入時など、クレジットカードが使えない場面にたびたび遭遇するので、常に現金をある程度用意しておく必要がある。

### ③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

寮の周りは住宅街で、小さな子供を連れた家族が夜に出歩けるほど治安は良い。大学周辺も閑静な場所である。市中心部は人通りが多いが、雰囲気は穏やかで、油断さえしていなければ犯罪等に巻き込まれる可能性は低いように感じた。知人の日本人女子学生達は、通りで見知らぬ男に声をかけられることが多かったようだが、無視すれば問題ない。

私自身は幸いにも、ロシアで体調を大きく崩すことなく過ごせたので、医療機関を利用することはなかった。寮の掲示板によると、大学不慮の医療機関がペテルブルク市内に存在しているらしく、インフルエンザなど重い症状の病気に罹った場合にはそこに相談するように、と書かれていた。軽い風邪を引いたり、胃の調子が悪くなったりした際には、日本から持参した薬が役に立った。

### ④留学に要した費用について(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

#### ・ 毎月の生活費とその内訳

生活費: 毎月およそ 50000 円

内訳

寮費: 13000 円

交通費: 2500 円

通信費(携帯電話料金など): 2500 円

食費(酒代・外食費含む): 20000 円

書籍購入費: 6000 円

娯楽費(演劇鑑賞など): 7000 円

交遊費・観光: 3000 円

その他雑費(日用品購入など): 2000 円

合計: 55000 円

#### ・ 留学に要した費用総額とその内訳

総額: およそ 90 万円

内訳

生活費 10ヶ月分: 55 万円

航空機チケット(東京-ペテルブルク間 2 往復分): 27 万円

荷物輸送費(空港での手荷物超過料金など含む): 8 万円

合計: 90 万円

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

東京大学が用意している奨学金制度は、留学を申請した時点で既に募集が締め切られており、利用することが出来なかった。その他の奨学金は、返済義務がある、審査が厳しい等の理由で断念した。

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

日本と同様、大学にはスポーツクラブやサークルがあるようだが、学習が忙しかったこともあり参加はしなかった。金銭面の問題から遠方に旅行することもせず、何度かペテルブルク郊外へ出かけたのみだった。ただ、サンクトペテルブルクは街全体が世界遺産に指定されている極めて美しい街で、市内を回るだけでも十分に観光はできる。劇場やコンサートホール、美術館、博物館などの施設も非常に充実していて、1年間過ごしても飽きることはなかった。

ペテルブルク大学には日本語を学ぶロシア人の学生が数多く在籍していて、交流する機会が何度かあった。

## 8. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

留学中は、各学部の留学生担当者に、滞在登録や授業履修をサポートしてもらうことになるが、対応は学部ごとに大きく異なる。例えば国際関係学部のような、留学生が数多くいる学部では学生への支援体制が良く整っているらしい。しかし、4年制の学生がほとんどの歴史学部では、留学生受け入れシステムが秩序だっておらず、放任主義である。期末試験の受験方法や成績証明の受け取り方といった重要な情報ですら、こちらから働きかけなければ連絡してもらえないので、何事も自分で管理しなくてはならない。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

大学の各キャンパスに図書館があり、Wi-fi でインターネットが利用できる(大学内ではどこでも Wi-fi が使えるが、図書館以外は接続が悪い)。ただし、本が所蔵されている場所に直接入ることは出来ず、注文票を書いてカウンターに渡し、本を書庫から取り寄せて貰う必要がある。しかも、短期留学生には本を貸し出してはおらず、本を読むために図書館にこもらなくてはならないので、大変不便である。

キャンパスには食堂が幾つかあり、値段も手頃だが、学生の数に対して非常に狭く、メニューも少ない。パンの自動販売機もあるが、割高な印象がある。私はサンドイッチなどを作って持参していた。

## 9. 留学と就職活動について

①(就職活動を既に行った場合)留学が就職活動に与えた影響、メリット・デメリットなど

②(今後就職活動を行う場合)留学が就職に対する考え方に与えた影響

留学中はロシア人のみならず、様々な国から来た学生達と接することになった。自分には理解しがたい文化の中で育った人々と、困難を感じながらも共に生活した経験は、就職活動や仕事の中で生かし得るのではと思う。

新1年生向けの授業の初回講義に出席した際、教員が学生達に対し、歴史学を学んだ学生が、その専門性を生かして働くことができる研究職以外の進路の例を丁寧に解説していた(学芸員や官庁など)。その後の学生達の自己紹介によると、彼らの殆どが大学院へ進学してからの就職を考えていると話していた。ロシアの大学においては、身につけた学

問や研究の成果を大学外でも発揮していくという意識が日本よりも強く、そのための土壌も整っているという印象をうけ、自分の進路選択を考える一助となった。

③留学中の就職活動への対策など(もしあれば)

④就職が決まっている場合は、差し支えない範囲で就職先をお知らせください

- 1.研究職 2.専門職(法曹・医師・会計士等)(職名: ) 3.公的機関(機関名: )
- 4.非営利団体(団体名又は分野: ) 5.民間企業(企業名又は業界: )
- 6.起業(分野: ) 7.その他( )

## 10. 留学を振り返って

①留学の意義、留学を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

得た物は非常に多く、充実した、楽しい留学生活だった。簡潔にまとめるのは難しいが、学問においても、そのほかの場面においても、自分にとって未知の物事と大量に接した経験を通して、今の自分には何ができて何ができないのか、これから何をしていくのかを見つめ直す機会となった。

②留学後の予定

留学を通して、自身がこれから研究しようとしていることは、確かに価値があることだという感触を得ることができたので、学部を卒業して大学院へ進学し、研究職として大学に残りたい。

③今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

ロシアに限らず、留学するというと、ひどく大きな決断が必要であるようにも見えるが、日本からの学生に限っても、様々な目的を持つ学生達が様々な制度を使ってロシアに学びに来ている。ヨーロッパから来た学生の中には、ロシア語を全く話せない学生も多かった。留学をあまり特別なものとして捉えず、気軽に挑んで欲しいと思う。

## 11. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

特になし。

その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。

街の様子など













東京大学での所属学部/研究科・学年(渡航開始時):人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学専修 M2

留学先大学:サンクトペテルブルク大学 留学先所属学部/研究科等:文献学部(修士課程)ロシア文学史学科  
卒業・修了後の就職(希望)先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業  
6.起業 7.その他(博士課程進学)

### 1. 留学先大学の概要

帝政ロシア時代から続く大学であり、ソ連時代から今日に至ってもなおロシア・アカデミズムを牽引する教育機関である。文学ではバフチン、ストルーヴェ、シクロフスキーなど欧米系の文学理論書でもよく目にする大物学者はほとんどペテルブルク大学から輩出されており、文献学部では今でもそうした教育伝統が守られている。昨今はプーチンやメドベージェフの出身学部である法学部が名門視されているようだが、文献学部はやはりこの看板学部であり、とりわけ東洋語学科は戦前、東大にも留学して日本学を極めたコンラドなど、ヨーロッパにおける東洋学のセンターの一つとして存在感を放っている。言語学系の学科もペテルブルク学派として未だ健在であったような印象を受けた。キャンパスはロシア的なイメージで美しい。

### 2. 留学の動機

学部時代に一度長期留学していたため、今回は生活体験や語学習得ではなく、純粋に文献収集、現地教授との意見交換、単位取得など研究目的であった。そのため、あらかじめ「誰それ」教授に指導を受けたいといった目星をつけておき、学習プランに関しても渡航前から一定のイメージを持っていた。

### 3. 留学の時期など

- ①留学前の本学での修学状況: 西暦[ 2013 ]年 学部/修士/博士[ 2 ]年の[ 1 ]学期まで履修
- ②留学中の学籍: 休学/留学
- ③留学期間: 2013年 2月 ~ 2013年 6月 学部/修士/博士[ 2 ]年時に出発
- ④留学後の授業履修: 西暦[ 2013 ]年 学部/修士/博士[ 2 ]年の[ 2 ]学期から履修開始
- ⑤就職活動の時期: 西暦[ ]年 学部/修士/博士[ ]年の[ ]月頃に(行った/行う予定)
- ⑥本学での単位数: 留学前の取得単位[ 30 単位以上] 留学先で取得し、本学で認定された単位[ 10(認定予定) ]単位 / 留学後の取得(予定)単位[10 ]単位
- ⑦入学・卒業/修了(予定)時期: 西暦[2012 ]年 [ 4]月入学 西暦[ 2013 ]年 [ 3 ]月卒業/修了
- ⑧本学入学から卒業/修了までの期間: [ 2 ]年[ ]ヶ月間
- ⑨留学時期を決めた理由

学費の問題もあり、通常修了期限の2年の枠内で留学したかったので、修論提出や単位与件を考え、年明けから半年の留学(つまり1 Semester)に決定した。このようにすれば、東京大学と留学先で両方学べて、かつ2年いっぱい修士課程を卒業できるからである。(一年留学すると、どうしても修士修了に3年かかってしまう。)

### 4. 留学の準備

#### ①留学先大学への入学手続き(手続きにあたってのアドバイスなど)

ペテルブルク大学の事務は英語対応可なので、英語さえできれば問題はない。しかし、せっかくだから初中級ロシア語でコンタクトを取ってみるのも留学の内かと思われる。この大学は留学生受け入れに慣れているので手続きに困難は感じないだろう。

## ②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

基本的に自分でロシア大使館に行くことになる。ビザに関しては一週間ほど待てば手数料無料だが、翌日発行希望だと数万支払うハメになるのでゆとりをもって手続きを進めたい。

## ③医療関係の準備(出発前の健康診断、予防接種等)

ロシアは英文のエイズ検査書がいる。これがやっかいで、都内ならどこでも一万から数万は掛る。いくつかの医療機関を比較し、なるべく安いところを選びたい。エイズ検査をやっているけど英文は出していないというところもあるだろう。私は日比谷クリニックへ行った。即日診断書を出してもらえるが、やはり一万弱はかかる。学生には痛い手続きは手続きなので仕方ない。

## ④保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

朝日海上火災保険の留学生保険。これはジェイアイと提携しているので、サービス内容は他の大手と変わらない。保険料は半年で2万5千円程度と相当安いプランにした。

## ⑤留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

特に問題はなかった。

## ⑥語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

学部時代に T P K H (TOEFLのロシア語版)の大学院入学レベルを持っていたので、問題はなかった。現地ではロシア語の証明書が要求される。もっとも、証明書など現地では事務員の誰もが気にかけておらず、要は自分が現地の授業に出たとき、教授のハードルを越えられるか越えられないかという個人的な問題なのである。現地で単位が取れるか取れないかはやはり本人の語学力にかかっている。よって留学前に少しでもロシア語力を高める姿勢は不可欠。ロシア語証明がない人は教授の推薦状で乗り切ることになるが、留学後に現地の語学学校で相当の努力を要するであろう。

## ⑦日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

何しろロシア語力の向上。文書を読めるといった能力より、自ら書き、話せる能力がこの上なく大事である。渡航前に東京ロシア語学院や他大学のロシア語会話クラスに通うなど、意識的に向上することは留学後の成果を倍増させる。英語以外の初修言語の国に渡る場合、日常会話の参考書を求め、丸暗記するなど受験勉強さながらの地道な努力に泣かされるのが留学の裏側である。(いわゆる自由でクリエイティブな会話というものは語学書のひな型が空で言えるようになって、さらに当該国の文学やメディアなどの知識が重なった時に出来るものだ。それまではひたすら基礎に忠実であるほうがよい。喋っても通じないことにクヨクヨしないのだ、と渡航前に腹を括っておくとよい。現場でコツは必ずつかめる。)

## 5. 学習・研究について

### ①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

- ロシア文学批評史 ●史的詩学 ●ロシア哲学史 ●文学理論概論
- フランス語

### ②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

「史的詩学」や批評の授業は日本のどこの大学、ロシア語、スラヴ学科に行っても、おそらく誰も講義していないだろう。欧米ではマルクス主義の「古式」で時代遅れだと思われているが、「バフチン以前にどういう理論を誰が言ったか」という根源的問題は、日本ではほとんど誰も言及していない。欧米系文学の盲点を振り返る意味でも、貴重な講義体験であった。(そして教授は日本の先生よりもさらに神がかり的に講義するので感動する。)また、ロシアは欧米と違い、今でも文学を史的に捉える学派である。教授も自ら、ペテルブルク大が、欧米が放棄した「文学史観」の最後の砦だとおっしゃっていた。ロシア人学者の書いた論文が、「何故そう書かれるのか」という所も、一学期通して講義に出なければなかなか分かりにくいだろう。授業は院生でも

講義形式が多く、演習形式では課題図書熟読と討論といった具合である。

日本では一作家主義の文学研究がほとんどだが、留学することで研究対象を大局から俯瞰するという姿勢がとりわけ身についた。一作家主義はじつは日本人研究者の嗜好でもあり、現地で国際学会に出ると、一作家をまた別の作家に照らして分析するなどの研究姿勢も見られ、日本の文学研究の「職人的仕事」と、向こうの「関係性を捌く政治家的仕事」の差に愕然としたものだ。どちらがいいとは言わないが、世界のアカデミズムの差を修士のうちに認識できたことは有意義であった。

学習は、院生なので図書館や部屋に籠ることが多かった。昼ごろ図書館に行き、必要な基本文献を請求して、閉館の夜九時ごろまで（白夜なので「夜感覚」はゼロ！）ノートに必要な箇所を書き写すというアナログな学習姿勢を通して。単にパソコンの持ち運びが重かったというだけだが、他方、最近のペテルブルク大の学生はラップトップを持って図書館に来る子が多い。その辺は日本の学生と変わらない。留学生は書籍を借り出せないという規則があったせいで、図書館に齧り付くほかなかった。文学部図書館の場合、カウンターのお姉さんに頼み込んで、学生証を預けて一日二日だけ借りられることがあった。そうやって切羽詰った気分の本を読む日々だった。不条理という他はない。

だが、一番感激したのは、「史的詩学」の女性の先生に心温まる指導を受けられたことだろうか。イリーナ先生という方だが、5ページほど、与えられたテーマで論じた露文のレポートを持参すると、その場で文法的ミスを訂正してくださるという親切ぶりで、その後、個人的に、テーマ面で論文指導をしてくださった。また、口頭試問の日も、うまく解答できなかった部分をその場で紙にボールペンで図式しながら丁寧に説明してくださった。魯迅の『藤野先生』という短編に出てくる、主人公の答案を真っ赤に添削する先生の姿が想起された学びの場であった。「帰国しても論文読んでいただけますか？」と尋ねると、「*Ради Бога!*」「神さまのために（後生だから）どうかお送りください」と返ってきた。ペテルブルク大の先生が、「神さまのためにどうか！」と口にする場面はしばしばあったが、これも土地柄か。留学を通し、ロシア語の論文をロシアの先生に送るという目標もできた。また「ロシア哲学」でも、期末レポート課題がA4で15頁前後と、なにしろロシア語で書くとなると苦戦したが、そこでも友人が添削を引き受けてくれ、大変ありがたかった。感謝したい。

一般的に、ペテルブルク大学では未だ古い形式の学問が残っている。教授は講義室に入ると、何も見ずに手ぶらで90分講義なさる。また語り口は平易である。日本では教授の講義は、プレゼンや学生の発言を交えた相互形式がメジャー化しているが、こうした学びは、意外とスポンジのようなところがあって、形式の主体性が知識の内実を取りこぼしているのではないかという漠然とした不安はあった。実のところ、先生が、先人の書物を文字通り講義し、それを学生が拝聴するという大学の昔の姿こそが、講義後の問題意識の芽生え方も含めて、刺激的だった感触がある。やはり、手ぶらで現れて毎回90分、本当に何も見ずにたっぷり講義して帰っていくロシア哲学のおじいさん先生は圧巻だった…… 自主的な創造性に重きが置かれる今日、先生にひたすら耳を傾け、ひたすら先人の書いた物を読み、そして口頭試験で聴き覚え、読み覚えた知識を説明するというスタイルは現代の学生には流行らないだろう。しかし、丸一学期間そうした古いスタイルで学び終えてみて、ロシア文学研究者として必要な骨格が形成されたという充足感が得られたことは事実である。

### ③1学期あたりの履修科目・単位数、週あたりの学習・研究時間(授業時間・授業以外の学習時間)など

科目数は5コマで、日本で在学しているペースとさして変わらない。週あたりの研究時間は食事と睡眠時間以外は何かしら本を読んだり書いたりしていたのでほぼ終日フルタイムといえる。

### ④学習・研究面でのアドバイス

留学生は図書館から本を借り出せないのが本当に苦しい。だが、大学内の小さな本屋さんでは日本で手に入りにくい学術書や参考書が（日本的には）かなり安く売っている。

### ⑤語学面での苦労・アドバイス等

図書館の司書の無礼な態度。早口で何を言っているのか本当にわからず何度もいらいらさせられたが、我慢する他ない。語学が出来ても、日常生活ではやはり躓くことがある。教養のある人々との会話ではこうしたスト

レスは生じない。

## 7. 生活について

### ①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舍の様子、見つけた方法など)

基本的には外国人専用の寮。大学からオファーが来る。家賃は月二万弱かそれ以下だったと覚えている。

4人か6人のコムナルカ(トイレ、バス、キッチン共用で、二、三のベッドルームがあり、一部屋にベッドは二、三である)形式

### ②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

冬はいわずもがな厳しい。夏は涼しく快適だが、白夜はちょっとキツイ。生活テンポが乱れやすいし、夜の12時ごろまで陽光が照っており、身体が眠らない。

大学キャンパスは、特に文献学部に関しては夏には中庭に草花が咲き乱れ、チェーホフやツルゲーネフの小説の描写を思わせるような女性的な美しさがある。文献学部の構内はちょっとしたお城のような感じで、古いは古いが入ってすぐ大きな鏡が立っており、階段も石造りで、近代化される以前の19世紀のヨーロッパの大学という雰囲気。東大の男性的なキャンパスとは対照的。建物自体はロシアらしく色とりどりでスタイルが決まらずゴテゴテと塗りたくられている調子。こぢんまりしている。

昼食は学内のカフェだが、昼食時間は混雑しており、しかも現地感覚的にはそんなに安くない。パンやおやつ程度で昼を済ませている学生は多い。

私は現地でクレジットカードを財布ごと盗まれたので、途中、現地でズベルバンク(ロシアの銀行では一番手)でドル建ての口座を開設し、必要なとき地元の両親に国際電話し、三菱銀行から送金してもらっていた。手数料は10パーセントなので、結局クレジットより高くつくぐらいだが、仕方なかった。地方銀行やゆうちょでも海外送金は取り扱っているが、地方都市の場合、職員が海外関連の業務に慣れていないことがあり、多少手数料がかかっても、都市銀大手のほうが送金自体スムーズだった(らしい。両親談)。ズベルバンクに関してはカウンターのサービスが欧米、いや日本並みで、若手職員などソ連時代を微塵も感じさせない笑顔対応なのでズッコケました。三菱UFJだと、送金して翌日か翌々日までは現地の口座にお金が入っているので便利。

### ③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

普通に暮らしていれば治安はよい。日本の保険に入っていれば、中心街の国際クリニックにかかれる。

### ④留学に要した費用について(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

#### ・毎月の生活費とその内訳

日本でもアパートを借り、一人暮らししているが、だいたい東京での単身生活費の半額くらいと考えてよからう。もっとも観光、遊興、外食などの比重によっては、大分掛ろうが、普通の暮らしをする分には西側先進国以下で済む。

#### ・留学に要した費用総額とその内訳

往復航空券(エアフロート)が11万ほど、寮費が半年で8万ほど、生活費が月4万に満たないくらいか。しかし留学初期にスマートフォンを購入するなど、何だかんだあったので、最初の月はやはり出費がかさんだ。しかし問題は、筆者のように地方出身学生だと、半年という中途半端な期間ではアパートを引き払う訳にもゆかず、日本で毎月カラ家賃として払い続けねばならなかった点である。

### ⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額・見つけた方法など)

### ⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

学期が終わってから欧州へ旅行に行った。ペテルブルクはヨーロッパのどの都市へも飛行機ならば2-3時



間ほどで行ける。授業のない日に同じ寮の娘さんたちとマルリンスキー・コンサートホールでチャイコフスキーコンサートを聴きにいった。最前列で観ても 3000 円もかからない。ドストエフスキー博物館といった、文豪の旧アパートなど名所は山のようにある。マイナス十度の美しい街中を足早に見て回ったのも今となっては夢のよう。エルミタージュやロシア国立美術館などは、何度も通わないとそもそも作品を觀賞しきれない（ペテ大の学生証明書で入館料はタダ）。

## 8. 留学先大学の環境について

### ①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

全般的に留学生の受け入れに慣れており、国際関連の職員も 20 代から 30 代の若い人たちなので英語も通じるし、いわゆるソ連的な障壁は感じない。付属語学学校には自分に合うレベルがなく通わなかったが、親切な印象は受けた。

### ②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC 環境等)

図書館では留学生は閲覧だけなので厳しい。これは最悪。日本から LAN ケーブルだけ持っていくといい。大学にインターネット会社があり、寮で安く繋げる。現地の電話会社で無線契約するよりは大学のネット会社のほうがスピード的に快適。

## 9. 留学と就職活動について

### ①(就職活動を既に行った場合)留学が就職活動に与えた影響、メリット・デメリットなど

### ②(今後就職活動を行う場合)留学が就職に対する考え方に与えた影響

### ③留学中の就職活動への対策など(もしあれば)

### ④就職が決まっている場合は、差し支えない範囲で就職先をお知らせください

1. 研究職 2. 専門職(法曹・医師・会計士等)(職名: ) 3. 公的機関(機関名: )

4. 非営利団体(団体名又は分野: ) 5. 民間企業(企業名又は業界: )

6. 起業(分野: ) 7. その他( )

## 10. 留学を振り返って

### ①留学の意義、留学を通じて成長したこと、その他留学を通じての所感

博士課程進学を視野に入れ、修論を完成させるための留学、といった感じで目的はかなり決まっていたが、今にして思えば留学できなかつたら、学業的にはカタストロフになっていた(ことにも気づかなかつた)かもしれない。修士の半年を留学に充当する、ということは、短い研究を非常に左右する。日本では文献だけになるほど金と手間さえかければ向こうで手に入るものも大抵手に入ってしまうご時世である。しかし重要なのは現場でひととおり「ロシア文学を専門とする修士学生が受けるべき」講義を受け、現地の教授に指導を受けるといった地味な学業だ。これが、帰国してからの修論のプランを左右した。博士課程になって留学する人は多いが、修士での留学をおすすめするのは、修士が文字通り博士の基礎教育をやっており、この部分こそ何をテーマに研究するにも基本骨格となるからだ。日本では、その国の国文学についてオールマイティーな視野を得ることは正直困難だと思う。修士に入った瞬間から自分のテーマである作家作品研究に突入してしまうから



で、博士修了まで、おそらく一作家の世界で完結しがちなのではなからうか。

それから、もう一つ現地で感じたこと。我々にとって外国文学であるロシア文学も、現地では紛れもない国文学であり、国のアイデンティティーといったインナーな部分の核を担う学問領域である。したがってある程度、保守性の風当たりは感じる。経済や国際関係学部のミーハーな性格と比べれば一目瞭然だが、露文を専門とする者にとっては講義が楽しくてしょうがない。ちなみに文学部は女子大状態。男子はほとんどおらず。ちょっと目が醒めた。

当初、「この先生」に会いたい、といった目星があったが、行ってみると別の先生に魅力を感じて、いろいろ指導してもらったことがある。ペテルブルク大には批評分野をはじめ大物の先生が在籍しており、知り合いになれたことは大きな収穫。期末試験の答案（A4の白紙裏表びっしりに、アドリブでテキスト分析する試験）を評価された時は、来て本当によかったと実感した。

## ②留学後の予定

博士進学予定。

## ③今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

非英語圏の言語を専門にすることに対する風当たり（つまりマイナー言語を専門にすることの、一層のマイナー化）がどうも強くなってきているご時世です。そして、多くの学生はキャリアステップのために英語圏へ行きます。しかし、共通語としての英語ではなく、その国に住む人々の土着の言語を学び、飛び出し、相手を理解したいと希求する皆さんは、その国の文化の立場に立って物を考えようという、思いやりと積極性に溢れている点で、近年言葉の張りぼてと化している「国際」の真髄に到達できるかと思います。コミュニケーションが図れた、というレベルの国際性に留まらず、じっと沈黙し、相手に目と耳を傾け、懸命にその国のありのままを発見するという品格を持って、無駄とは思わず、ぜひ英語以外の言語文化に没頭してみてください。世界観がほんとうに変わります。東大は非英語圏の国々と、多くの留学協定があるかと思います。たとえ現地で英語の講座があり、英語で切り抜けられるとしても、まさにその国の土着の言語を吸収する皆さんが、国際化のフロントランナーにあらず、影武者として地味に「国際化」を支え得るかと思います。

## 11. その他

### ①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

ペテルブルク大学のパンフレットなどでも十分。地球の歩き方を持って行けば便利かもしれないが、現地の本屋で街のガイドブックを買っても大丈夫。

その他東京大学のホームページ・出版物等に掲載してよい留学中の写真があれば添付してください。



〈コメント〉 寮生活 上はベッド、下は机。スズランは路上のお婆ちゃんから買ったもの（大原女か?! .....)



上は可愛い文献学部。 下はロシアのクレープ（ブリヌィ）を家で再現してみました。





初夏の大学図書館。冬が空けて青空が爽快。



アレクサンドル・プーシキン。